人権啓発アニメーション

●43分　16ミリ ¥265,000 178495
ビデオ ¥ 80,000 179080（学校価格¥45,000）
※表示価格には、消費税は含まれておりません。

一枚の絵てがみ

ふれ合いと支え合いの街づくり

北九州市人権啓発映画制作委員長　井上重人

「『人を憎むことは簡単だ』しかし『人を愛することは難しい』。『優しい』という言葉には『人の憂いがわかる』という意味と『そういう人こそ優れている』という意味がこめられている」。これは、人権問題の研究会で学んだ言葉です。

今、私達は、相手の憂いのわかる優しい心や、人と人とがふれ合うことの大切さを忘れてはいないでしょうか。

映画の中で介護ボランティアの女性が、

「お年寄りは、生まれた時からお年寄りだった訳じゃない。若い頃に持っていた夢や希望の灯が消えてしまった訳じゃない。生きている限り、何かしたいの。生き甲斐が欲しいの。でも身体はいうことをきかない。この悲しさは、若い人には理解できないと思うわ。でもね、思いやりの心があれば、手をかしてあげる優しさがあれば、その悲しさは、きっと救われるわ」と言っています。これは、お年寄りに対してだけでなく、障害のある人、病気で苦しんでいる人に対しても言える言葉ではないでしょうか。私達はこの言葉を自分のこととして考えてみる必要があると思います。

中学生とお年寄りとの交流の場面が、この映画の一つの重要なポイントになっています。近年、希薄になったと言われる地域のつながりを今一度、取り戻すためには、若者達の理解と、行動力が必要になってくるのではないかと思います。

小・中学校の学習の時間に、そのような取り組みを積極的にとり入れ、人間のぬくもりのある社会を取り戻すことを期待したいと思います。

《企画》北九州市／北九州市教育委員会／北九州市同和問題啓発推進協議会
《制作》株式会社学習研究社　■アニメーション制作　マジックバス

《ポイント》

高齢者問題、女性・男性問題、外国人問題、環境問題、
子どもの教育、こころの「もやい」

梢　「あの…暑いのに大変ですね」
洋三「なあに、好きでやっとるんだよ。自分の住んでいるところぐらい綺麗にしないとな」

《企画意図》

この映画は、一人暮らしの高齢者とその家族や地域の人達の心のふれあいや支え合いを通して、これから訪れる超高齢化社会に向けての問題を投げかけています。

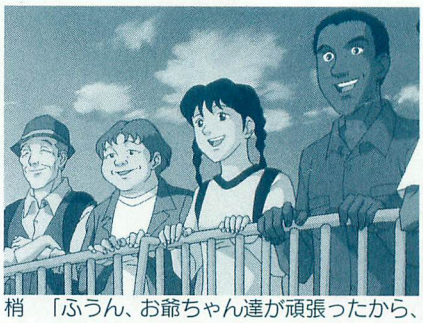
今後、高齢化はますます進み、2,015年には国民の４人に１人が、2,050年には、国民の３人に１人が高齢者となる時代が訪れます。また、平成12年４月から介護保険がスタートしましたが、高齢者が地域の中で生き生きと暮らしていくためには、生きがいや、家族・地域の支え合いが必要です。

このような状況の中でこの映画は、「人権教育のための国連10年北九州市行動計画」の基本理念である「こころのもやいを大切にするまちづくり」と、「いのちと環境の調和をめざすまちづくり」を基調テーマとして、高齢者問題や女性問題などの人権問題を考えていただくために制作しました。

この作品を通して、高齢者の生き方やそれを支える家族や地域の在り方について考えてみていただきたいと思います。

敏江「私の時代は、女は結婚したら家事と子育てが仕事って決まっていたからねえ」

あらすじ



梢　「ふうん、お爺ちゃん達が頑張ったから、今の日本があるんだ。」
お爺ちゃんA「そう言われると、なんだか恥ずかしいな…」

北九州市に住む中学２年生の沢田梢は『学校だより』の編集委員。皿倉山の麓の町に住む祖母の敏江は夫を亡くしてから、花作りを生き甲斐にして一人暮らしをしている。

敏江は、高齢者の介護ボランティアをしている隣家の須藤安子に誘われ、近隣のお年寄りたちが集まる“絵手紙クラブ”に参加することになる。梢は『学校だより』の仲間と一緒に、敬老の日特集のためにその“絵手紙クラブ”を取材することになり、楽しそうに集う多くの高齢者たちや日本文化に触れたいとやって来た外国人たちと出会う。

その中には、絵手紙が縁で知り合い、高齢者同士の結婚をしようとしている秋山洋三と望月栄子がいるが、二人は洋三の息子たちから結婚に強い反対を受けて悩んでいた。

ある日、敏江は腎性高血圧で倒れ、梢の家で療養することになる。パートで忙しい梢の母・君子は敏江の看病の負担が増え、将来敏江との同居を考える夫の修治とつい衝突してしまう。大学受験を控える梢の兄・文彦も神経を尖らせ、梢の家庭は次第に不協和音が漂うようになってくる。そうした家族の空気を感じて居場所のない敏江……。

敏江の寂しさを察した梢は、皿倉山の麓の家に敏江が育てていた花の様子を見に行く。敏江が大切にしていた菊の鉢はほとんど枯れてしまっていたが、その中にたった一つだけ蕾をつけた鉢があった。梢は、その菊の鉢を近所に住む栄子に預かって貰うことにする。

梢の家では、模試の結果が悪かったことが原因で文彦が君子に八つ当たりする。「婆ちゃんが来てから勉強にならないんだ！」と言う文彦の言葉を聞いた敏江の心は深く傷つく。

栄子から、預かった菊の花が咲いたという絵手紙が梢の家に届いた日、敏江の姿が家から消える。安子たちにも協力してもらい、敏江を捜す梢一家。そこへ遠くの病院から敏江を預かっているという連絡が入る。病院に駆けつけた梢たち一家は、知らず知らずのうちに敏江の居場所や生き甲斐を失わせていたことを反省する。

そして、敏江の菊を預かって世話をしていた栄子は、見事に咲いた菊の花にある希望を見出し、今まで逡巡していた洋三との結婚に一つの答えを出そうとしていた……。

お求めは……

24-04899　'00／5㊐

学研
情報メディア事業部
〒146-8502　東京都大田区仲池上1-17-15
TEL(03)3726-8558 FAX(03)3726-8626